

砂 時 計 NO、20 郡山市立橋小学校学校だより

発行責任者 佐藤 守広 発行日 平成22年2月8日

毎日各教室を回りながら子どもたちの学ぶ様子を見てみると、あらためて様々なことに気づき、時には新鮮な驚きにも出会う。教師をなりわいとしている私が、こんなことを言うのもおかしいが、これは事実なのだ。先日も中学年のある学級で授業を見せていただいていると、「この問題の解き方がよくわからない人はいますか？」という先生の呼びかけに、素直に「はい」と手を上げ、「〇〇の問題がわかりません」と答えた児童がいた。その後、先生は、その問題を全員のものとしてあらためて丁寧に説明し、理解が完全になったかを確認していた。私は、この場面をとともうれしく見ていた。「授業は、こうじゃなくちゃあ」と思わずつぶやいてしまった。そうなのだ、わからないことは良いことなのだ。わからないからこそ学ぶのだ。そして、わかったときには、大きな達成感が味わえるのだ。さらに、大切に思うことは、たとえ自分ひとりでも「わかりません」と言える勇気を持つことだ。

～数学の授業で私は・・・

それは、中学生になって間もない頃の数学の時間に起きた失敗だった。一次方程式の解を求める授業だったと思う。先生の質問をよく聴き取らぬまま、課題を軽率に把握した私は、真っ先に挙手をした。周囲の仲間たちは、まだ問題とにらめっこをしている最中であつた。勇んで手を上げた私を、彼らは驚いたような表情で見た。「ほんとかよ・・・」親しい友人の一人が声を上げたほどだった。内心、私はうれしかった。「どうだい、ちゃんと予習もしてきたんだよ。」と言いたかったのだ。担当のH先生は、にっこりと微笑みながら私を指名した。「それじゃ、黒板に式と計算を書いてもらおうか。」、先生の声が終わらぬうちに、急いで黒板に駆け寄り、勢いよくノートに記したものを写していった。そして、意気揚々と自分の席に戻ろうとしたそのとき、「それでいいかい？」という先生の声が私の背中に聞こえた。一瞬何のことか理解できなかつた。答えは完璧のはずだった。乱雑な字であつたが、写し間違いはなかつた。怪訝な思いを抱えたまま着席した私を見て、H先生は、クラス全員に向かって、ゆっくりと一言ずつかみしめるような口調で問題を解説しはじめた。その途中で、私は自分の解法に誤りがあることを発見した。しかし、時すでに遅かつた。穴があつたら入りたかつた。「何て僕はおっちょこちょいなのだ。二度と発表なんかしないぞ。」そう思った。みんなの視線が自分の背中に突き刺さるように感じた。息苦しい時間が流れ、自己嫌悪と恥ずかしさで顔を上げるのできなかつた私に、先生の声が聞こえてきた。「佐藤君、ありがとう。真っ先に私が一番教えたいところを気付かせてくれる発表をしてくれたお陰で、全員がよくわかつたと思う。ここは、誰もが間違い易いところなんだよ。本当にありがとう、発表は勇気があるよね」。先生の言葉は温かつた。私には、先生の配慮が十分すぎるほどわかつていた。先生の思いやりに涙が溢れそうだった。

今、同じ職業に身をおく私には、あの時の先生の気持ちが痛いほどわかる。柔道の有段者でもあつたH先生は、何と繊細な心をお持ちだつたのだろう。その日は、研究公開の日にあたつていて、教室いっぱいの参観者が見守る中での授業であつた・・・(佐藤)